慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イタリア文学と言語教育における «ironia» の識別 : ポジティブポライトネスとしての一考察
Sub Title	Identification of «ironia» in Italian literature and language education : consideration as positive politeness
Author	長谷川, 悠里(Hasegawa, Yuri)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.20, (2023.) ,p.67- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20230000-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イタリア文学と言語教育における «ironia» の識別

――ポジティブポライトネスとしての一考察――

長谷川　悠　里

はじめに

イタリア語の「ironia　アイロニー」は、修辞学などの伝統的な定義では、文字通りの意味とは反対の言葉を伴う言説、または発話の背後にある意図を擬似化する表現と説明されるものである。

ironia の識別と理解は、イタリア語教育における重要なテーマである。人工知能研究の分野においても、アイロニーは人間の技巧的な言語表現であるとともに、複雑な心理要素を伴うため、「人工知能はアイロニーをどこまで識別できるのか」という識別条件を定義する研究が行われている。

アイロニーの成立には、文字で書かれた文章にせよ口頭の会話にせよ、一定の文脈条件と発話者の期待や否定的感情という発話環境が必要である。心理学の領域では、アイロニーを理解するためには「心の理論」すなわち「他者の心を推測し、理解する能力」が必要不可欠とされる（Happé 1994：130–139)。そのため外国語学習者のアイロニーの理解には、心情や期待を推測・認識する高度な言語能力も求められる。

さらにイタリア語においては、しばしば ironia は人間関係を深めるためのポジティブポライトネス・ストラテジーの一環として用いられ、「scherzo 冗談」のかたちをとる。このとき対話者が初級・中級のイタリア語学習者である場合、その意図を「理解する能力」がないためポジティブポライトネスとして識別されず、そのことが良好な人間関係構築の妨げとなる可能性もある。そのため実践的な会話の授業では、ironia を認識できる言語能力を高めていくことが求められるのである。

しかしながらイタリア語教育において、日本語話者の学習者を対象とした ironia 表現指導や、その学習をどのように導入するかといった実際的な問題についての研究は、極めて少ないのが現状である。本稿では、先行研究を踏まえ、イタリア語学習者がイタリア語を学ぶ上で広義での ironia の在り方を習得するための教授法について考察したい。

1.「アイロニー標識」について

日本認知科学会の研究調査では、言語発達年齢が九歳の定型発達児および高機能自閉症児を調査の対象として、聞き手がアイロニーを文字通りに解釈してしまう発話ケースについて検証されている[i]。

話者の態度を読み取ることのできない、いわば中立的イントネーションが伴うアイロニーの場合が、定型発達児も自閉症児も文字通りの解釈を選択する傾向があった。しかしイントネーションによって話者の態度が示唆された場合、文字通りの解釈を避けることができることが示唆された。(松井 2014：53)

この事例はイタリア語学習者の場合にも当てはまる。イタリア語においては頻繁に ironia が日常会話に活用されるが、「中立的イントネーション」を伴う発話の場合は、イタリア語を学ぶ途上の学習者はそれが反対の意味を持つことを理解できずに困惑することがしばしばである。ある会話表現が聞き手から「ironico（アイロニー的)」であると理解されるには、現実と反対のことを述べていることが明白となるような、否定的なイントネーションを伴う必要がある。しかしながら文章においては、音調や韻律上の特徴がわかりづらいため、副詞や形容詞による膨張表現が特徴である「アイロニー標識」の認知が不可欠となる。

一般的に日本語においても、アイロニーまたは反語として成立するには、それに適した発話状況があることに加え、話し手の心理的要素が一定の条件を満たしている必要がある。すなわち話し手の期待と現実の不一致、それに対する不満、怒り、失望、批判、嫉妬などの否定的感情である（内海 1999：701)。

2．イタリア現代文学をテキストとした実践的検証

2-1．日常会話にふれることのできる文学作品の採用

外国人のためのイタリア語教育において、ironia の実践的用法に関する指導法を研究するため、筆者はミラノ大学大学院でイタリア近現代文学から教材テキストを選んで実験授業を行った。

報告対象の授業

1）授業時間：90分
2）使用言語：イタリア語
3）受講生：29歳～ 62歳の社会人
4）受講生レベル：中級～上級
5）テキスト：イタリア近現代文学作品

6）受講生の国籍：非ヨーロッパ文化圏出身者約60％、ヨーロッパ文化圏出身者約30％

イタリアの一般家庭における日常会話を参考にする目的で、本実験授業で使うテキストは、近現代小説のなかから女性作家のルイゼッラ・フィウミの『女として、ゼロ』（*Come donna, zero*, 1970）を採用した。

2-2.『女として、ゼロ』（*Come donna*, *zero*, 1970）

1924年、イタリア・ミラノ生まれの女性ジャーナリストのフィウミは、現代イタリア社会における家族の問題に対する深い洞察と、鋭い風刺とユーモアのある作風の作家として知られる。

『女として、ゼロ』（*Come donna, zero*）は、1970年代に出版されたフィウミの最初の著書である。彼女の結婚生活と、平均的なイタリアの家族の日常風景に加え、家庭のなかで絡み合う複雑な人間模様を、「妻」であるフィウミ自身の視点から ironia とユーモアを交えて描き出している。

『女として、ゼロ』の主人公はフィウミ自身でもある。さらに「完璧な不完璧な妻で、家族の中心」でもある彼女は、多くの現代イタリア社会における典型的な母親像と、その苦悩を体現しているといえるだろう。

この物語の主人公である「“不完全”な妻」は、男性至上主義者であるがゆえに偏見と矛盾に満ちた夫である «il Bosi» と、彼女を常に批判的な眼差しで見つめる実母、そして青春真っ盛りの双子の娘たちという多様な面々に囲まれて日々の暮らしを営んでいる。夫は「妻とは別の階層に属する人種」であることを自負しており、自らが「あらゆる女性を幸せにすることができる完璧な夫である」ことを信じて疑わない。そうした高慢な夫との関係がもたらす閉塞感、そして社会的評価の与えられることのない主婦という名もなき仕事に埋もれ、主人公は自らが「女として、ゼロ」であると感じながら生きている。

フィウミはユーモア文学者に送られる Dattero d'Oro 賞を受賞[ii]しており、代表作に付けられた『女として、ゼロ』という題名は、多くのイタリア人が女性と母親としての理想像のあいだで葛藤する心の声を代弁したものである。この物語の根底には、表1のような「アイロニー成立要件」が普遍的に存在している。

表1　作中の普遍的なアイロニー成立要件

感情	主人公の話し相手（夫または母親）と人間社会に対する不満、怒り、失望、批判、嫉妬などの否定的感情
環境	主人公の心のなかにある現実への期待と、彼女を取り巻く現実（家庭）と人間社会との不一致

2-3．読解と読み聞かせを通して

アイロニー成立要件である主人公の「人間社会への期待」は、しばしば実母から受ける皮肉に満ちた言葉によって損なわれる。「妻」と、その実母および «il Bosi»（夫）との会話には、ironia に当てはまる言語表現が多く見られるが、そのなかから以下に例を挙げる。

スウェーデンでは子どもが産まれるたびに父親が六ケ月の育児休暇を取得することができるということを、母は新聞で読んで、到底納得できないという顔をしていた。
「そりゃ、こうでなくちゃね！」と彼女は言った。「父親が育児休暇をとるんだって。まるで男が子どもをつくるみたいにさ」
「男は子どもをつくらないなら」とわたしは腹が立って言った。「誰の子だっていうのよ？」
「誰が子どもをつくるだって？ やんなっちゃうね、おまえは。母親に決まってるでしょ！」
「だから、その子どもは誰の子なのよ？」とわたしは言った。
「そりゃあ母親でしょ！ なに言ってんだか」彼女は答えた。
「その通り」とわたしは言った。「だからこそ、子どもは母親の名字を受け継いで、子どもに対する権利だって、母親が行使するんですものね」
「それは違うね」と彼女は言った。「子どもは父親の名字を受け継ぐんだよ。当たり前だろう？ 本来なら名字だけでなく、子どもに対する権利だって、すべて父親が行使すべきなんだ。それができないもんだから、母親が代わりにやっているのさ」
「名字も子どもに対する権利も、両方ね」とわたしは返した。「でもさっき、母親が子どもをつくるって言ったじゃない」
「ああ神様！ なんて面倒な子なんだろうね。なんてフェミニストなんだ。いったい、どこに行き着きたいのかね！」と彼女は叫んだ。

『女として、ゼロ』に描かれる家族の会話には、しばしば字面通りの言葉の意味だけではなく、言外の隠された意味が含まれる。イタリア語の自然な会話において、隠された意味の伝達は付随的なものではなく、むしろ言外に含まれる思惑の伝達こそが本質的な機能であると言っても過言ではないだろう。主人公とその母親には相いれない根本的な意見の相違があるが、それは常に言外の思惑としてアイロニー表現のなかに隠されている。本実験授業において、受講者には下記のような読解問題を通して、まずは母と娘の関係性を明らかにしていった。

読解問題①
次の質問に回答しなさい。
1．スウェーデンの父親の育児休暇のニュースに、主人公の母親は同意していますか？

2．主人公の母親は、「母親」という存在についてどのような考えを持っていますか？
3．なぜ主人公は母親に対して怒っているのですか？
4．主人公は母親の発言に関して、どのような矛盾を指摘していますか？

読解問題①（3）に関しては、主人公が母親に腹を立てている理由を理解できなかった受講者が、全体の24名中15名に上った。母と娘それぞれの苛立ちや否定的態度を暗示する手がかりとして、イントネーションや音調、アクセントといった韻律上の特徴がある。そこで授業で読み聞かせを行ってみたところ、話者のイントネーションが伝わり、ironia に当たる台詞を推測して言葉の「真義」をより理解できることが確認された。

さらにテキストを用いてアイロニー標識の識別を行い、表２の三段階のアクティビティで構成される授業で理解を深めた。

表２　文学作品を用いた授業内アクティビティ構成

時間（90分）	目　　的
20分／第１段階： テキスト読解	・物語背景の解説 ・読解問題を通したテキスト理解と翻訳
40分／第２段階： アイロニー標識の識別	・ironia にあたる言語表現を抽出 ・主人公や登場人物の感情と発話環境についての理解
30分／第３段階： ironia の翻訳と解釈	・ironia の字義通りの翻訳 ・その意味についての考察

2-4．書き換えの練習問題

表３の練習問題では親子の会話内容から ironia に当たる台詞を抽出し、実際の意味に相当する文章に書き換え、さらに読み上げるアクティビティを行った。

表３　アクティビティ事例

«ironia» に当たる会話文を抽出して、その実際の意味を書きなさい。
解答：
① 「Ci mancava solo questa!」（母親）
→ 実際の意味「なんてことだろう」

② 「Infatti」とわたしは言った。「だからこそ、子どもは母親の名字を受け継いで、子どもに対する権利だって母親が行使するんですものね」（主人公）
→ 実際の意味「それはおかしい」「だったらなぜ、母親の名字を受け継がず、子どもに対する権利も母親が行使しないのでしょう」

«ci mancava solo questa!» は、膨張表現のアイロニー標識で、直訳すれば「足りないものはこれだけだった」となる。イタリア語では多用される表現だが、日本語話者が適切な翻訳をなすことが難しい定型句である。これは受講者に知識があれば ironia であることが認知できる。一方で、受講生のうち50％以上が、「infatti（その通り、実際に）」がアイロニー標識としての副詞であることを判別できなかった。そのため後に続く会話文が ironia であることが認知できず、この場面の不穏な発話環境を想像することができなかった。

言外に含まれる、主人公とその母親、そして夫との対立感情により、『女として、ゼロ』の会話文には ironia の成立要件が普遍的に揃っている。このようなイタリア現代文学作品は ironia の学習には最適なテキストとなり得る。

次に実践会話のアクティビティでは簡単な文章を教員がスクリーンに投影し、それを見ながら受講者が ironia に言い換えていく作業を行い、実際にどのような定形句やイントネーションを用いるかということを学習していった。

表４　イタリア語の «ironia» に関する問題 ①

次のフレーズの実際の意味を考えなさい。

１．Ma sei veramente furbo!
あなたは本当に賢いひとだ！
解答例：（世間知らずのひとに向かって）あなたはなんて愚かなんだ！

２．Mica male ! Vale la pena!
悪くないね！ その価値はある！
解答例：（不当な高額商品に対して）ひどいものだ。そんな価値はない！

３．Non ho mai visto un film finire così.
こんな映画の結末は見たことがない。
解答例：（使い古された筋書きに対して）ありきたりな映画の結末だ。

表５　イタリア語の «ironia» に関する問題 ②

次のフレーズを «ironia» の表現に直しなさい。

１．Che cattivo!（料理が）とてもまずい！
解答例：Che bontà! なんて美味しい！

２．Non ho mai visto un uomo così cupo! あんな暗い男は見たことがない！
解答例：Non ho mai visto un uomo così allegro! あんな明るい男は見たことがない！

３．Ma che brutto questo dipinto. なんて醜い絵なのだろう。
解答例：Ma è un capolavoro questo dipinto. なんという傑作だ。

表４はもとの文章が ironia で、それを字義通りの言葉を用いた表現に変えるという練習問題だが、その発話環境の想像も促すことで受講者のより深い ironia の用法理解に繋がった。また表５の問題では受講者がイントネーションを「ironica（アイロニー的）」にしながら読み上げるようにすることで、実践の場面でイタリア語話者の心情がどのように表情や声音に表れるかという有益な学びを得ることができた。

３．ironia の言語的特徴と知覚について

日本語母語話者同士の会話では、アイロニーはネガティブに知覚され、それに呼応して話者自身が否定的に見られることが多い。しばしばアイロニーを交えて話すことは無礼な態度を取ったと解釈され、そのため日本語母語話者が日常会話のなかでアイロニーを使うことは稀である。

しかしながら、日本語の文章では、批評的表現形式として、アイロニーは頻繁に使用される。例えばエンターテインメントの世界では、政治、時事問題、ゴシップに関する記事でアイロニー表現は多く見られる。イタリア語と異なる特徴は、日本語では否定的な事柄を表現するために使用され、その逆があまりないことである。

先行研究では、発話の間接性やユーモア・冗談が、アイロニーを肯定的に受け取るかどうかに与える影響について、聞き手の個人特性や話し手と聞き手の関係性という側面から検証を行っている（秋元 2011：371）。

冗談関係は，相手に冗談を言うという側面だけでなく，相手から冗談を言われるという側面についても同時に形成されていくものであると考えられることから，冗談関係の認知尺度の得点が高いほど，相手からのアイロニーを，親しさを伝える攻撃的冗談として肯定的に受け取るのではないかと考えられる。

イタリア語では、特に若年層の会話表現では、親しみを込めた「scherzo 冗談」として ironia が多用される傾向にある。ただしまったくの反語を「scherzo 冗談」と知覚できる発話環境にあり、また被受容者にその意図を汲み取る「共感能力」がある場合にのみ成立するものである。その条件が欠けた「scherzo 冗談」としての ironia であれば、例えば日本語話者にとっては理解しがたい文脈で受けた、唐突な侮辱となってしまう可能性もある。

本実験授業では、日本人受講者のひとりが、イタリア語口頭言語の冗談や ironia の発話において、意味を正しく知覚することの難しさについて参考事例を述べた。あるイタリア人の若者が、「まだ二十代だというのに、年取ることを恐れている」ひとりの外国人女性に向かって、「すでにきみは皺だらけだよ！」と冗談を言った。その若者は女性が笑ってくれるものと思ったが、イタリア語初級者であった彼女は、それが「scherzo 冗談」とは理解できなかった、と

いうのである。

ここで問題なのは、イタリア人にとって ironia が対人関係における親しみの気持ちを示す表現の一種でもあり、聞き手の共感能力を前提とした、人間関係を円滑にするための言語ストラテジーであるということである。

一つの考え方は，アイロニーを肯定的に感じるかどうかには，アイロニーがユーモアを含むこと自体ではなく，聞き手がそのユーモアをどのように評価するのかが重要であるという考え方である。大津（2004）は，遊びとしての対立が成立するためには，聞き手にそれが遊びであると認められなければならないと論じている。（秋元 2011：371）

つまりある発話のアイロニーが肯定的に受け取られ、冗談として成立するためには、聞き手からポジティブポライトネスとして評価される必要がある。上記の例で述べるならば、発話者のイタリア人の心情にあったのは「嘲笑」とは対極にある「親愛の情」なのである。

おわりに

イタリア語の口頭表現では、話者同士の親密度が増せば増すほど ironia は多用される傾向にある。それはさらに一歩踏み込んだ親密な関係を目指す「ポジティブポライトネス・ストラテジー」として発話される。

このストラテジーは、相手との距離を縮め、相手のフェイスに積極的に関わろうとする「共感」、「連帯」と位置づけられる。相手を気遣い、共感できる点を探り、同じ方向性を向き、共同性を持とうとする。まさに、対人配慮のストラテジーであるといえる。（渋沢 2016：429）

しかしながら、イタリア語話者の ironia がこのような「対人配慮のストラテジー」として理解されない場合は、発話者とはまったくの逆効果を引き出すことになり、両者が親しくなる可能性を秘めた途上でコミュニテーション上の深い溝が生まれることになる。

実際に上記の女性はイタリア語中級学習者となってから初めて、イタリア人が「scherzo 冗談」を言うときはしばしば「antifrasi 反語」を伴うということに気がついたという。しかしながらそれがなぜ「笑い」に繋がるのかということについて、特に日本語母語話者のような異文化圏の学習者が共感的理解に至ることは難しい。だからこそ特に非ヨーロッパ文化圏出身の学習者には、円滑な人間関係を築くためにも、イタリア語の学習に際しては単純な言語能力の向上に加えて、ポジティブポライトネス・ストラテジーとしての ironia についての体系だった学習が求められるのである。

参考文献

秋元頼孝、宮澤志保『アイロニーの受け取り方を規定する要因の検討』、東北大学心理学研究82巻、p. 370−378、2011年。

内海彰『アイロニーはどのように識別されるか：暗黙的提示に基づくアイロニーの識別モデル』、人工知能学会誌14巻 4 号、p. 700−708、1999年。

河上誓作『アイロニーの言語学』、待兼山論叢 文学篇32巻、大阪大学、1998年。

河上誓作『アイロニーの認知モデル』、英文学研究支部統合号 4 巻、日本英文学会、p. 349−356、2012年。

小林聡『イタリア語文道法』、大学書林、2001年。

渋沢優介『ポライトネス・ストラテジーの観点によるコミュニケーションスタイルの分析』、東洋大学大学院紀要53巻、p. 427−443、2016年。

松井智子『高機能自閉症児のアイロニーの理解：イントネーションは手がかりとなり得るか』、日本認知科学会第31回大会、『アイロニー研究の新展開』、p. 53、2014年。

Attardo S., *Irony as relevant inappropriateness, Journal of Pragmatics*, 32, p. 793-826, 2001.

Colombo S., Corino E., *MorFo (Morfemi Fondamentali On-line) per (far) impara le parole italiane*, in Valentini A./Bozzone Costa R./Piantoni M. (eds.), *Teaching to learn in Italian L2: study skills from school to university, proceedings of the conference-seminar, Bergamo 14 to 16 June 2004*, Guerra, Perugia, 2005.

Happé F.G.E. *An advanced test of theory of mind: Understanding of story characters' thoughts and feelings by able autistic, mentally handicapped, and normal children and adults*. J Autism Dev Disord 24, p. 129−154, 1994.

Wilson D. & Sperber D., *On verbal irony., Lingua* 87, p. 53−76, 1992.

Fiumi L., *Come donna, zero*, Arnoldo Mondadori Editore, Milano, 1974.

Fiumi L., *Madri e figlie*, Arnoldo Mondadori Editore, Milano, 1975.

Patota G., *Nuovi lineamenti di grammatica storica dell'italiano*, Il Mulino, Bologna, 2007.

Pazzaglia M., *Il Novecento*, in *Testi e critica con lineamenti di storica letteraria* 4, Zanichelli, Bologna, 2000.

Pichiassi M./Zaganelli G., *Viaggio nell'italiano contemporaneo attraverso i tesi*, Guerra Edizioni, Perugia, 2003.

註

[i] 『多言語多文化児童の認知特性に関する基礎研究』（松井：2016）は多言語多文化環境における言語発達と、日本人保護者の教育および言語習得に関する意識と行動についての調査研究である。また未就学児を対象とした、家庭言語と社会言語が異なる環境で育つ子どもの言語発達についての研究も含んでいる。

[ii] Dattero d'Oro per Humorous literature（27th Edition of the International Exhibition of Humor, 1974）